

現在の男女共学は女性のためになっているか

溝口フアビエンヌ

はじめに

- 一 男女共学は期待を裏切った
- 二 男女共学より女性の自覚こそ有力
- 三 歴史の繰り返し
- 四 男女共学の導入者の意図
- 五 導入者の用心
- 六 男女共学を受け入れるにはまだ十分成長していない社会に導入させてしまった
- 七 男女共学において、社会のなかで既にあった男性と女性との関係はそのまま学校の中に持ち込まれた
- 八 日本の女子大学：考慮すべきアイデア
- 九 男女共学は、男性にも有利ではなかった

「男女共学」というのは教育の最高の方法であって、女性が社会に参加するための最上の方法であり、性差別をなくすことができると言われており、チャンスの平等

の鍵として見なされているということ、私も聞いたことがあります。一言で言えば、男女共学はいわゆる「進歩」と言われていますが、男女共学は男尊女卑をなくす力を持っているでしょうか。男女共学は、進歩と呼ばれるほど女性の尊厳につながったのでしょうか。

いかえれば男女共学というのはすなわち、女性の教育を男性主体の教育の中に巻き込む方法であって、女性の教育を女性自身に任せることで、女性たちが自らの考えに基づいて行動することを巧妙に避けるための方法ではないでしょうか。男女共学は、女性の教育を男性の監督のもとに置き、女性の進歩に常に上限を付けるのにもっとも適した、反動的な統制の作戦であったのではないかと、この点について、考えてみたいと思います。

一 男女共学は期待を裏切った

男女共学が実施された当初には確かに、女性が男性と同じ学校で同じ科目を勉強すれば、同じ仕事ができるのでは、という期待があったと思います。

ところが、就職においては学歴の影響が大きく、社会的に威厳をもたらず職業や、収入の高い職業、つまり自由業、管理職、高級公務員といった職業においては、女性の占める割合の上昇率は大変緩やかなものであって、五〇年あまり続いた男女共学の影響はごく少ないとしか言えません。例えば自由業について言えば、医師、歯科医師、日本では弁護士といった職業での女性の占める割合がもっとも少ないのです。弁護士の場合、昭和二四年の女性弁護士の割合は〇・〇五%、ちなみに平成七年は六・五九%であり、六・五四%の増加率を示したに過ぎません。つまり、女性の割合が増えたことは否定出来ないとしても、四六年間という長い期間を考慮した場合、年間増加率は〇・一四%となり、男女共学の効果がほとんど見られません。

また、高級公務員における女性の割合が本格的に増え

はじめたのは、昭和五〇年代からで、例えば、裁判官の場合ですと、昭和二五年から昭和四四年までは、女性裁判官の割合は〇・〇九%、昭和四四年に一・六六%となり、増加率は一・五七%という停滞状態を示していました。

しかし、次の二〇年間では、昭和四八年から平成七年までのあいだに、女性裁判官の割合は一・八六%から八・二一%まで上昇し、上昇率は六・三五%を示しています。したがって女性裁判官が増えはじめたのは、現実には昭和四八年からであり、男女共学の働きというよりも、世界規模のフェミニズムの影響のせいであると考えることができそうです。

(資料：労働省統計―第五章 女性の政策決定参画 表五―二―六 一〇三頁)

さて上記のように、高級公務員の場合における価値観は多少変わったと言えるのですが、企業の場合ほとんどひとつも変わってはいません。例えば昭和六一年の大学卒業者に占める女性の割合は、一二・二%に対し、企業における女性の部長の割合は一・一二%でした。

(資料：労働省婦人局統計平成七年 八四号 一〇二頁)

平成六年になると、大学卒業者の女性の割合は二一%になりましたが、女性部長の割合は平均一・四一%に止どまるといふ顕著な停滞状態を示しております。男女共学は職場という局面において、女性に責任ある待遇の良、威厳あるポストをもたらしなかつただけではなく、相変わらず社長達から見た企業では、仕事は男性を中心に与えられます。結局、企業においては男女別制度が相変わらずのもので、男女共学は企業の門でストップすることなりしました。

二 男女共学より女性の自覚こそ有力

フランスの場合の、女性の人口における働いている女性の割合の推移を見ますと、一九〇一(明治三四)年が三六%、一九四六(昭和二一)年が三二・五%、一九六二(昭和三七)年二九・六%、一九八五(昭和六〇)年三六・八%となっています。戦後からの本格的な男女共学による働く女性の割合の変化はとくに見い出すことはできません。(資料：フランス労働省統計八五年版)。しかし、社会環境という観点に立ってみれば、つ

まり、日本とフランスの間で働く女性の職種、給料、自己の自由時間、また自己の趣味の発達つまり自分自身を実行するチャンス、家庭における母親への尊重などにおいて、それなりの差が認められると言えましよう。

例えば賃金という点だけから見れば、フランスでの女子の賃金は、昭和六一年の統計で、男女の賃金格差は八二・二%(男子1100)となっていました。(資料：労働省婦人局「婦人労働実情」平成三年版 付九八)。ところが日本では、平成六年の統計で男女の賃金格差はじつに六二%(男子1100)となっています。

(資料：働く女性の実情No.八四 平成七年版 付六三)

このような男女の賃金格差は、男女共学という教育システムとは関係のないものであって、それはつまり女性たち自身が自分たちの地位を高めるためにどのぐらい頑張ってきたかという事を表している数字なのです。

三 歴史の繰り返し

女子の大学卒業者は就職ができず、日本を襲ってきた

不況は、女性の真実の社会的地位の現像液のように働き、あらゆる仮面の下から、もっとも粘り強い家父長制の姿を引きずり出して見せてくれました。これまでの歴史の中でも、女性を家に戻すことは、よく見られることで、フランスにおいては、革命の中から民主主義が生まれてきたと言われていますが、残念なことに女性たちがさて民主主義の観念を家庭の中にも持ち込もうとすると、あっけなく門前払いされてしまうことになりました。革命を起し、封建時代を終わらせた人たちは、社会の中で民主主義を導入することで自己の解放を追求しましたが、家庭の中では相も変わらぬ家父長制を維持してきたのです。結果的には、女性の中にも革命に参加して権利の獲得のために命を落とした人々がいましたが、いざ革命が終って見たら、女性たちは元の場所に引き戻され、革命で獲得された権利からは、見事に排斥されることになりました。一八〇一年の法案に、「女性に読書を教えるのは禁止する」という女性の教育に関しての考えを表しているものがありますが、その根拠は何でしょうかなにやら女性が大学に入れば国は滅びるといふ日本の「亡国論」を連想させます。

ドイツにおいては女性たちは、一九三〇年代までは公務員になったり、勤務したり、大学に自由に入学したりしていたのですが、第三帝国の経済政策によって、女性は一時停職処分、人員整理などのかたちで（一九三三年四月七日の法令）大量に解雇されることになりました。そして、大学でも、女性の入学人数が制限されることになってしまいます（一九三三年四月二五日の法令による）。

現在でも、女性の解雇は法令の規制によるものではなくても、明文化されていない規則はいくらでもあると思われれます。フランス革命やドイツの第三帝国までさかのぼらなくても、我々にもっと身近な例があります。フランスで、ダイエー上院議員 (le sénateur DAILLET) が、失業率を縮小させるために「女をベッドに戻そう」と提案しました。日本では、それほど下品な言葉は使われませんでしたが、七年ほど前だったでしょうか、当時の農林水産大臣が、女性の運命は家庭であるといったような発言をして、日本のフェミニストたちの怒りを買ったことはご記憶にあるでしょう。

現在、就職を希望する女子学生に対して、企業からの

返事は、「今年は女性を採用しない」「残念だが、採用者の内定はもう終わった」というものが多く、それはすなわち女性を家庭に引き戻すための新しい作戦であり、歴史の繰り返しを示しています。

時代とともに作戦は変わりましたが、女性に対しての社会の態度は、本質的に変わっていません。長期に亘って女性に対しての観念の変遷を見えますと、「男女共学」が導入されてからも大きな変化は見えず、男女共学が女性の歴史において転機を与える力を持たなかったことは明らかです。現在の、「女性が就職できない」という実態は今さら驚くべきことではなく、何も新しいことではなく、歴史的に完璧なまでに継続性を持った現象と言えるのです。

四 男女共学の導人者の意図

戦前は世界的に女性の教育のレベルはかなり低く、このような状況を存続させるのはいけないことだと、男女共学についての考えを始めた人たちは思っていました。彼らは、女性に対して何らの悪意を持たない、良心的な

人々でした。女性を男性の学校に通わせれば女性の教育度が上がり、女性のためになると考えた上での、好意的な計画であったことは間違いありません。

男女共学のおかげで女子は、男子と同じ学校に入り、男子と同じようなことを勉強しましたが、頭も破裂しなかったし、脚に毛も生えてはきませんでした。不妊にもならなかったことは立証されていますし、国は滅びるなどと心配された「亡国災害」も決して起こりませんでした。例えば、フランスでは、一八九四年に一四カ国の前でオリンピックを復活させるように提案した人であるピエルク・クベルタン (Pierre de Coubertin 一八六三―一九三七) が「女性は二〇〇mを走ると、死ぬ」という予想しましたが、その予想は、確認されませんでした。冗談にも見えるそれらの説は、女性を排斥するために本気で用いられたのですから、笑うべきことではありません。その面では確かに、女性に対する偏見を取り除くために、男女共学が効果的な役割を果たしたことはそれなりに認めるべきであり、女性を男性と同じ学校に通わせた創設者たちに感謝するべきでしょう。

五 導人者の用心

フランスでは、一八三八年に、師範学校 (ÉCOLE NORMALE) が女性に開かれ、一八四二年には、医者や歯医者になることが女性に許されました。そして一九〇〇年に、女性は弁護士になることが許されましたがしかし、どこかの窓が解放された反面、どこかの場所でも束縛が強められました。例えば一八四八年に、政治集會に参加することが女性たちに禁じられてしまいました。一八八〇年に、高等学校が女性に開かれましたが、フランスで国立試験である高校の卒業試験「BACCALAUREAT」(この試験は大学入学試験となり、私立高校もこの国立試験に従う。フランスに私立大学はありません)を受けることは許されていませんでした。つまり何と、高校に入ることが許されたのですが、卒業することは禁じられた! というわけです。

一九一九年に、やがて、女性には BACCALAUREAT を受けることが許されましたが、それは男性の BACCALAUREAT と同じ卒業試験ではなく女性のた

めに特別に設置されたもので、BACCALAUREAT FEMININ (女子 BACCALAUREAT) と名付けられたものでした。日本においては、女子大学と男子大学を二つに別けて、同じように区別を付けようとしていました。まるで、男女共学の導人者たちというのは、ご親切にも、女性の首輪の縄を緩めはしましたが、首輪そのものを取り外そうとはしなかったのです。

六 男女共学を受け入れるにはまだ十分成長して
いなかった社会に、導入させてしまった

女性と男性を同じ学校、同じクラスに入れること自体は悪いことであると思えません。ただし、まだ偏見のある社会、まだ遅れている社会の中に、新しい観念を導入すると、社会がこの新しい観念をなかなか同化せず、通常の価値観を通して解釈し、観念が曲げられてしまいます。男女共学は、そのような観念であるようです。つまり、上記に述べたように、学校で男性と女性を平等に扱おうとしても、社会においては、その平等がなかなか実行されません。そして、伝統的な問題行動が、なかなか改まりません。下記の二つの例、スカートめくりと女性

の権威の否認を取り上げてみましょう。

私は、大学のクラスで、小学校の頃の女子と男子の仲について、女子大学生の思い出を聞いてみました。小学校時代、男性と女性の間に何等の問題もなかったと言った大学生もおりましたが、大半の女子学生は、例えば給食のときは女性のみサーブスをしていた、掃除の時間では男性が遊んだり、喧嘩したりしてちゃんと掃除をしていなかった、そして、男性に攻撃されたり、蹴られたり、たたかれたりすることもしばしばであり、その行動のなかで最もいやな思い出を残したのは「スカートめくり」だった、と言いました。

私は、スカートめくりの話聞いて、私もまた、かつてむなししい怒りでいっぱいになったこと、恥と屈辱感の交じった言いようのない悲しみ、うつむいたままで、目に涙を浮かべて家路についたときの苦味がはっきりと思い出されました。現在の大学生の話聞いて、「何にも変わらなかった」と驚いてしまいました。確認を取るために、友人の朝日新聞の記者に聞いたら「スカートめくりって、国技だったんですよ」と。もう一人に聞いたら

「スカートめくりはボクの得意だった」と。再確認のために私の娘(一七歳共学高校生)に聞いたら、「フランスではよくやっていた。日本ではそれほどやっていたが、もっと卑怯なことをやっていた。いじ悪かった。女性に唾をかけたり、後ろからたたいたり、厭味を言ったりとか。ホントむかつく……」。

フランスにおいても、男女共学は、女性が平等になるために大きな役目を果たした制度である、という意見は普通です。

しかし、フランスの最初の女性首相であったEdith Cresson は全く受け入れられず、メディアの中で世界の記者がフランスの記者と声を揃えてメディア的なリンチを行ったのでした。政権が女性として考える女性に侵略されたことは、世界の歴史上初めてのことでした。何故ならばイギリスの男性社会の価値観を脅かしていないサチャー女史とはまったく違って、Edith Cresson は女性として考える女性だったからです。イギリスの雑誌『THE SUN』は一九九一年に、Edith Cresson について次のように書いていました。「彼女(Edith Cresson)

が、男の人のことを良くわかっているのは、ミケランジエロよりも天井をたくさん見たからである。」つまり、どのメディアでも、日本のメディアを含めて、彼女に対して厭味や冗談をよく言っていました。彼女の能力、彼女のアイデアについては一言もありませんでした。そのとき、テレビのニュースでは、彼女のふくらはぎが大写しされ、インタヴィューでは見かけ上のことや私生活が聞かれ、記者のコメントは彼女の身体、服装などについてでしかありませんでした。

彼女は、このような方法でおとしめられ、彼女の知性、彼女の話の内容を判断することが避けられました。Edith Cresson が受けたのは、メディア的なスカートめくりでした。

そして、もっとも悲しいことは、インタヴィューには女性記者も参加していたことです。当時、フランスでも、日本でも、Edith Cresson を弁護する声が一つもあがりませんでした。女性の間に関連がないことは、またまた立証されました。男女共学が推進されて数十年経っているにも関わらず、昔と何にも変わってはいませんでした。

七 男女共学において、社会の中にあつた男性と女性との関係はそのまま学校の中に持ちこまれた

上記に述べたように、女性に対する社会の態度は変わらなかったのに、男女共学を導入すれば変わるだろうという考えには、何も根拠がありません。これまで社会の中に続いてきた習慣を、学校だけが免れたなどということとは、とてもあり得ません。女性に対する企業の状態、例えば女性を就職させない、昇進させない、結婚後は辞めてもらうなどという態度、および女性がやっている仕事の種類を見るだけで、男女共学が単に社会の中で通用していた男女の役割分担や男性と女性との上下関係という価値観を見直さなかったただでなく、逆にそれをそのまま学校に持ち込んで、社会の中及び家族の中で教えられていた男女の役割分担を学校で習うことになりました。この現象のもっとも顕著なのが、進学指導においてです。例えば、六〇年代（昭和四〇年前後）フランスの中学校で、女性の職業について次のようなプリントが配られました。その内容はつまり、「医師という仕事は、大

変えられる仕事であり、辛い場面を見ることもあるので、女性にとっては、医師よりも看護婦の仕事の方が良い」。つまり、未来の職業についての観念は学校時代から子供たちに教えられ、社会に入るときにはもう、役割分担が当たり前と思われてしまうことになりました。それについて、ある人が、男女共学でなくても、女子学校でもこのような指導が行われると言っております。それはもちろんのことですが、問題は、男女共学の場合その教えは同じ教室で、同時に、男性にも女性にも教えられ、両性の賛成を得た上で行われていることになり、正当化されているということとです。従って、昔、女子校で行われていたこれらの指導は、なくならないどころか反対に強化され、正当化され、当然のこととなってしまいました。

就職希望職種についての調査の結果によれば(資料：リクルートリサーチ、高校生の就職動機調査平成六年)、一般事務の仕事我希望している女子高校生は四一・六%となり、男性高校生は一〇・六%となります。受付の仕事我希望している女子高校生は二一・一%となり、男性高校生は一・二%となります。

この調査の中で、もっとも考えさせられた数字は、次のようなものです。医療関係の仕事我希望する女子高校生は八・八%で、一方男子の方は二・一%となり、あきらかに下回っています。しかし、実際、医師や歯科医師になるために大学に入学する学生の割合を見ますと七一%は男性という結果になっています。つまり、医療関係の仕事の希望者は、女性の方が多くにもかかわらず、医学部を選択する段階になると、圧倒的に男性の数が多くなります。つまり、学校の段階での就職の希望は、学校の進学指導者及び家族によって左右されたということが言えるのです。

そして、大企業への就職を希望している女子高校生は六・八%です。男子は一四・一%なので、女性の二倍になります。ところが逆に、大企業には就職したくないという返答をした、個性的な、自分の能力だけで成功できる自信のある高校生の割合は、女子五・五%、男子五・四%で、なんらの男女差を示してはおりません。

この最後の数字は、もっとも意味のある数字であると

思われます。つまり、個性的で、大胆で、自信のある、独立心のある、つまり進学指導の効果が少ない高校生においては、女性と男性の割合が同じであるということですから。このような結果をみると、職業において見られる分担は、女性の趣味や男性の趣味によるものであるという解釈よりも、学校で行われた文化的条件付けの結果であるのではないかということが十分考えられるのです。

教科書を見てみますと、教科書に登場する女性は主婦で、しかも子供のある女性です。独身の女性なら「姉」と決まっています。離婚した女性、結婚せずに一人で住む女性は教科書には現われません。そして仕事に関して言えば、外で勤める女性は決まって店員や事務員で、さもなくば（最近の教科書でも見ましたが）小説作家なのです。つまり、教科書に登場する女性たちは、つまらないと考えられている単調な仕事をしているか珍しい仕事をしていることになり、高い学歴を必要とする仕事、専門的な能力を要する仕事をしてはいないといえるのです。教科書の中の、女性の仕事は、勉強が主にならない天才によるもの（小説家）あるいは誰でもが出来る仕事（事務）であって、本人の知性、判断力および本人の

研究、勉強による仕事ではありません。

男女共学がまだ行われていなかった今世紀のはじめに、人間の性関係を研究した社会学者である Havellock 氏は、男の子の間では、女の子として生まれた方が良かったと考えていた者は一〇〇の内一人しかいなかったという観察をしております。一九七五（昭和五〇）年の、フランスの学校における、女性のイメージについての子供に対する調査結果を見ますと（資料：“FILLE OU GARÇON” DENOEL 出版社、Madeleine Laik 著）その比率は一〇〇年前の場合とほとんど変わりませんでした。そして、その調査における子供たちの返答は、仰天させるものでした。たとえば、「女性と男性が平等になってしまったら、ボクは「ハラキリ」するよ」「女が奴隷でないのなら、妻に自分の名前を与える必要なんかない」「大きくなったら、ボクは女を殺す職業に付きたいんだ」……のような回答が寄せられたのです。

とにかく、この調査によると、五〇年間の男女共学のおかげで、女性の方はあきらかに自分自身についてのイメージを良くしていると言えるのですが、男性が女性について抱いているイメージの方は、ほとんど変わりがな

かったのです。

そもそもそれを目論んでいなかったとしても、男女共学は結果的に、性的な差別を当たり前と思わせて、また差別を差別として見えなくするという本質をもつ教育方法です。男女共学は、いわば、女性の成長を促進させるというよりも、男性社会の存続を確保するための仕組みであると考えられるのです。男女共学という制度はまぢがもなく優れたものではありませんが、まだ十分に成長していない社会の中に入れられてしまったために、方向転換を余儀なくされ、当初期待された効果をもたらすことができませんでした。

どういった社会においても、それまでの価値観とひどく差のある新しい観念が持ち込まれた場合、新しい観念はなかなかスムーズに受け入れられません。それどころか、それを無効にしようとするために、ある種の安全装置が施されるという状況さえ見受けられるのです。男女共学という制度の導入においては、それらの社会的反応が働いたということが考えられると思います。

八 日本の女子大学：考慮すべきアイデア

本論文において長く述べてきたことを一つの文章でまとめますと、男女共学は、《男尊女尊》につながるなかつた、ということになります。

どの社会においても、優越するグループの価値観はどうしても重んじられることになり、そうした特徴を持たないグループは軽蔑されることになってしまいがちです。現在の社会の中ではどうしても男性のグループの方が優越的であり、その優越的な価値観がいつの間にか男性全体の価値観となり、男性の利点、男性の特徴、男性の優れている分野のみが重んじられていき、それらを持たない女性たちは最も低い立場にたつことになるのです。

説明のために、逆のたとえを試してみることにしませう。例えば、もしかしてどこかにある人間社会においては「編み物」をすることが大変高い評価を受けるとしましよう。するとそういう社会では、編み物が嫌いで、下手な男性たちはまるで評価されない人となってしまい、蔑視されるというおかしなことになるわけです。つまり私の言いたいことは、価値観があるグループのみの特徴を重んじて構成された場合、その特徴を持たないグループの社会的地位は極端に低くなってしまふということだ

す。したがって、優越グループの特徴をもつために頑張る、たとえば、私たちの社会では、女性たちはたばこを吸ったり、酒を飲んだり、スポーツを男性並にしようとしたり、オートバイやトラックを運転したり、(フランスでは女性がバスや地下鉄を運転する)、とても若い女性は男性と同じ服装(若い女性だけではなくて、ある日、大井埠頭の東京税関で、男性と同じスーツやネクタイをして男性の歩きかたを真似ていた中年女性を見ました)などをしたりします。が、ご存じのように、このような猿マネはいつも、女性としての自信を失わせると共に、自分自身の価値を疑わせるといふ苦い経験をもたらして、失敗に終わることになるのです。

いわゆる社会的地位の低いグループにとっては、こんなことをするよりむしろ、何とか自分たちの特徴を認めさせる手段のための方向を見つけ出すことのほうが重要になってくるでしょう。ところが、男女共学というのはどう考えても、男性の価値観を持ち込むためのものではないので、女性に自分の特徴を認識させる手段を与えることの出来ない制度なのです。もし学校に本気で真の意味で

の男女平等を促進するつもりがあるならば、もし社会が教えている人道的なモラルと女性の扱い方を同じ準にしようとするのなら、例えば、まず、料理や掃除などは早々に学校から削除するべきでしょう。家庭にお任せして、お返しすべき分野だといえましょう。

というのは、学校で料理や掃除などのような科目を男子生徒に教えるとき多くの教師たちは、「男性にも女性たちがやっている彼女たちの分野のものを教えないといけない」という精神でやっているからです。料理や掃除はもっぱら女性の専門的な仕事だとしたうえで教えているだけなのであって、つまり、平等という仮面の下で男女の違いを教わっているというしだいなのです。このことは、教育そのものを総合的に考えるというよりも、男性の教育と女性の教育を二つに分けた状態にしておいて、対立させることになってしまいました。男女共学の実態をしっかりと眺めてみれば、社会の中で見受けられる男女の役割分担を決して捨てることをしないどころか、むしろ男女の役割分担を維持していると言えるのです。その結果、学校でこそ男性は掃除をしておりますが、結婚したのちはほとんどの男性が掃除機を見るだけでジンマ

シンを出してしまふようなことが起こります。最近の、週刊誌『アエラ』(八年四月ころ)に掲載された「ラーメン離婚」という記事は、男女共学が家庭の境を越え得なかったことについての典型的な事例となっています。

私は、日本にやってきたときに、女子大学という制度を初めて聞きました。最初はひどい差別であると驚きましたが、不況が日本を襲った今、女性の就職困難という問題に照らして考えてみた結果、女子大学は、男女平等への道の鍵を握っていると考えるようになりました。その点で、日本は非常に先端的な国となり、女性を救う手段において、全世界に良い例を見せてくれるのではないかと思います。

つまり、学校で行われている進学指導により、大学の選択及び職業の選択が男性と女性によって違う方向に転換させられることがあり、選択の段階ですでに不平等が生じることになってしまいます。そして、女性卒業者は労働市場に出るときに、男性と同じ大学を卒業した場合でも企業の社長たちからは、女性資格と男性資格は同等のものとして見なされてはいないように思えます。

同じ資格をもっていても、就職してすぐに男性の方がお茶くみに回されているケースは希なことですし、わずか数年後に、男性の方が女性よりも昇進したケースも多く見られるのです。そして、私が観察したかぎり、女性自身も、なんとなく自分が男性と同じ価値を持たない人間であるかのように、就職の面談のときは元気がなく、自信がなく、謙虚すぎて声小さく、うつむいて、威勢良く自分の能力を相手に分からせる力を持たないように思えるのです。

けれども、女子の就職困難について、雑誌の記事やテレビのリポートを見ると、彼女たちは女性たちが対等に扱われず、就職の面談の際にいやがらせなどを受けていることを十分に意識しています。ではどうして企業側はこんなことをするのでしょうか。どうして女性はその場でそれを受け入れるのでしょうか。就職したら、どうしてお茶くみ組、コピー取り組、弁当買い組、ごみ箱組になることを受け入れるのでしょうか。

もし、すべての女子大学が男子主体の大学と同じよう

にレベルの高い大学であれば、つまり、最初から男女共学ということとをせずに、女子大学に、男性の大学と同じような予算や、同じような能力のある先生、同じような面積の建物、同じような研究を行う機会など、つまり同じような手段を与えれば、女子大学は優れた大学となるのではないのでしょうか。そして、男性にも女子大学に入学したい気持ちを起こさせるようになったときこそ、男女共学は、自然に、健全に行われるようになると思われのです。現在、フランスでは女子大学はなくなりましてので、後戻りすることは難しいでしょう。しかし、日本では、女子大学というものがありませんので、それらが大変優れた、レベルの高い大学にすることが可能です。そうなれば、高いレベルの女子大学を卒業した女性たちは、労働市場に出るときに、自分が劣っているという観念を一切持っていない女性となり、就職面談のときにも自信いっぱい女性になりますし、男性からの嫌がらせや侮辱などは受け入れずに、就職しても、お茶くみやコピー取りを言い付けられても黙ってがまんしてなどない女性になるはずでしょう。つまり、家庭や夫婦の間での女性の役割や女性の思いやりが、職場にまで持ち込ま

れ、女性が甘くみられないよう十分な注意を払う女性になることができるのではないのでしょうか。

学校においては、男女の役割分担を連想させる科目はすべて廃止して、家庭に任せてしまうことが大切で、学校教育が社会における平等をもたらすための必要な条件であると考えます。つまり学校は「中性」になって、男女の違いを一切教えず、純粋な学問のみを教える場所にするというわけです。(そこに、では誰が掃除をするのと聞かれたら、掃除をするために人を雇うことも出来る、と答えられます。掃除をするということは、ほかの仕事同様、ごく普通の仕事なのであって、何も卑下する謂れはないのですから何かが悪れたら大工さんなどの職人を呼ぶのと同じように掃除屋さんと呼ぶのです)。

フランスでは、掃除と料理は学校の教科としては廃止されました。フランスの子供は、家で母親を手伝ったり、買い物をしたりしています。反対に、日本では、学校で掃除などをしている子供たちは、家では何にもしないという事実が目立っています。そして、小さい子供のある家庭では、下の小さな子供の面倒をみるのは、決して兄ではなく、姉なのです。つまり、学校で男性が受けてい

る家庭関係の教えは、生活の中では全く実行されていませんので、無駄な教えであると言えますし、また上記で述べたように、それは逆に、女性の役割としてのみ受け止められ、学校以外のところでは一切してはならないもののようなのです。

九 男女共学は、男性にも有利ではなかった

上記の例から見たように、男女共学というシステムは、伝統的なパターンを固定させた制度ですから、女性にとっても男性にとっても決して解放的なものではありませんでした。

例えば、仕事に関して言えば、女性が残業をすることについて抵抗していれば、男性が「男と同じように稼きたいなら、同じように働いてほしい」と、まるで男性的

なパターンが絶対正しく、それについての論争などしてはいけないように応えます。私は、このような言葉を耳にするとき、大変悲しくなってしまう。男性は、もっともマイナスなところ、つまり働き過ぎのために疲れる、過労死する、家庭のための時間がない、子供の成長を楽しむ時間がない、などという場所から逃れるチャンスをつかまなく女性から与えられているというのに、女性が差し延べている手をつかめず、逆に女性からの呼びかけに反撥してしまうのです。まるで、男性は女性の声を聞かないために最大の努力をしているようです。私は、五〇年におよぶ「男女共学」は、女性と男性の間のコミュニケーションを深めず、ものをもたらさなかったという気がしてしまいます。

(一橋大学講師)